

「チブ」に乗ってみよう ... 上士幌町・東泉園での体験

上士幌町の東泉園には、上士幌ウタリ文化伝承保存会の人たちによってつくられた「チブ(丸木舟)」があります。丸太をくりぬくのは大変な作業で、数人が交代で作業にあたったそうです。

毎年秋に東泉園でおこなわれる「マレック(マレク)漁の集い(北海道ウタリ協会上士幌支部)」では、池にうかべたこのチブに乗ることができます(p120)。

チブは、さおや櫂によってあやつるのですが、櫂を使うのはかなり技術がいるため、ここではさおによって動かします。基本的には、舟の先に立ち、さおを池の底につき立てて、ぐっと力をこめることで進めます。

乗ってみると、かなり安定していますが、思いどおりに動かすことは簡単ではありません。

バランスをうまくとりながら、腕だけではなく足腰の力も使ってあやつらないと、変な方に進んでしまい、池に落ちそうになることもあります。



チブにチャレンジする中学生の子ども。(上士幌町・東泉園)



東泉園の位置。上士幌町字上音更。



なかなか思いどおりに進まない。(上士幌町・東泉園)

とても長い歴史をもつ丸木舟 ... 和人をも運んだ「チブ」

アイヌの人に伝わる、舟についての伝説を紹介します(話:吉田常吉氏〔音更〕『杖のみたま(吉田巖)』より)

「ある時シャマイクル(人のすがたをしたカムイ・伝説の英雄)が、土で舟をつくって海に乗り出して、その舟をくつがえしたり、あるいはこわしたり、おぼれるまねをして苦しそうに泳いでいた。これはアイヌに航海の苦しみを知らせ、舟が大事なものであることを示したのだ。アイヌはこれを見習って、丸木舟をつくった。(一部略、やさしいことばに直してあります)」

アイヌの人々はこうした物語を通して、舟の大切さや舟をあやつる時の心がまえを子どもに伝えたのでしょう。

石狩市の遺跡「石狩紅葉山49号遺跡」では、およそ4千年前の縄文時代の丸木舟(一部)が見つかっています(p93・p87)。

丸木舟はアイヌ文化の時代だけではなく、もっと前の時代から何千年間も(おそらく1万年以上)使われてきました。

江戸時代に入り、和人たちがやって来るようになると、川をわたるための渡し舟として、アイヌの人のチブが利用されました。

あるいは、江戸時代末期に北海道内陸を探検した松浦武四郎たちは、川を下るためにアイヌの人のチブに乗せてもらっています。

さらに、明治時代になって開拓者たちがやって来るようになると、人やもの、農産物などを運びます。十勝川では河口部の大津(豊頃町)から内陸までの間を上り下りし、開拓の始まりを支えました。(p143・p159)

また、アイヌの人による渡し舟は、かなりあとまで川をわたる時の大切な足となっていました。



アイヌの人があやつるチブに乗って、川をのぼる開拓者。(上徳善七が描かせたもの)(上徳善司氏蔵)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん